

私は考えている。

第六章 来るべき革命の戦略

六八年五月は、革命としてはその端緒を示したにすぎなかった。五月の、またそれ以後のデモのスローガンとして繰返し叫ばれたように、それはまだ「単に初まり」でしかなかった。五月革命は、革命を遂行するに足る意識と力とが革命主体に欠けている時、革命は流産せざるをえないことを如実に示した、ともいえる。しかし一面ではまた、五月革命は革命戦略上の重要な問題を提起した。異議申し立ての有効性、前衛の新しい性格、文明そのものの問題化、经济管理の方向として、国有化ではなく自治管理の復権、労働組合、左翼諸党の非革命性の暴露などであるが、それらを通じて、またそれらとともに日本の状況を考え合わせて、来るべき革命の戦略はどのようなものであるべきなのか、それをこの章では考えてみることにしたい。

革命の戦略とは何か、ということについてはいろいろの定義があると考えられるが、ここでは、われわれ被抑圧者大衆はどういう状況にいるのか、その状況の中で何を望んでいるのか、その望みを達成するためには何をなすべきなのか、それらを明らかにする大綱を革命の戦略と見なすことにする。端的にいえば、状況と目標と目標達成の方法を明らかにすることである。そして、状況につ

いては、第二章、第四章で、目標と目標達成の方法については、第三章と第五章で、ある程度見てきたと思われるので、この章ではそれを整理してみることにする。

状況と目標については、一言でいえば、われわれは依然として人間が人間を支配する社会の中にいる、それを打破したい、ということに尽きるが、一層近づいて状況を見るなら、人間が人間を支配するということでは、われわれはかつてない、強力な巧妙な抑圧の下におかれている、と考えられる。

この抑圧の機構については、その形成の過程と現状について、もっと実証的な検討を加えなければならぬが、概括的にいえば、国家独占資本主義あるいは高度管理社会と呼ばれる体制であつて、それは資本の利潤の安定した確保とその発展のために、それによって利益を受ける支配層諸グループが、高度に組織した社会支配あるいは社会操作のメカニズムであり、われわれは否応もなく、幾重にもわたつてそのメカニズムの中に組み込まれている、そうしたものがわれわれがその中に置かれている現在の抑圧の機構である。それは、自由競争的な資本主義の過程をへて次第に形成されてきた、産業独占資本と金融独占資本の結合、それらの独占資本と政治権力、官僚との結合を中核とする、かつて例をみない集中的な寡頭支配の体制である。かつて例をみない、というのは、この寡頭支配層の手中にあるほどの決定権の集中は、歴史上に見られないものであるからである。彼らは、生産手段を、生産を、金融を、土地を、流通機構を、情報の手段を、教育を、国家財政を、公共事業を、立法機関を、官僚機構を、司法機関を、警察を、軍を独占している。そればかり

ではなく、生活様式を画一化し、彼らの操作可能なものとして組織している。

こうした驚くべき集中化された力を持つ抑圧の機構から、われわれ被抑圧者大衆が解放されるためには、それを打破する以外にはないが、そのためには、この抑圧の機構の強みと弱みを知る必要があろう。打破するためには、どういう弱点をつけばよいのか、強みである条件をどう変えれば、その抑圧の機構の基盤を崩すことができるのか、それを知るためである。

現在の支配体制の強みと考えられるのは次のものである。

一、国家機構と結合していること。それによって、資本主義そのものの存続を危ぶませるような、そうした深刻な危機は、政治的に、つまり国家財政政策を通じて回避できるようになっていること、また危機における損失は小ブルジョア、労働者、農民に転嫁できるようになっていて、独占資本とその同盟者の傷手は軽くすむようにできていること。

二、一応の物質的な安楽を被抑圧者大衆に与えるのに成功していること。それによって大衆の不満を緩和するとともに、購買力としての大衆消費市場を確保していること。

三、この抑圧のメカニズムの外では、ほとんど生存できないように社会を組織していること。現代社会で生きてゆくには、そのメカニズムが許容する範囲にとどまらねばならず、それを思い知らせるたびごとに、日常生活のあらゆる面で、体制の強大さに対する諦念を育てる機会を設けていること。

四、抵抗の緩衝材として、議会制度、労働組合、革新諸政党を持っていること。それらの諸機構

が体制を補強する役割を果たしていること。議会が国民の意思の決定機関であることの欺瞞性は、今更いまでもないし、労働組合や革新諸政党の存在は、体制を打倒するものではなく、その中の不満緩和の機関であり、そうであることによって体制内における一つの機能を果たし、そうした相対的な権力を持っていることに満足している実態は、今日では明白な事実となっている。

五、柔軟性を持っていて、体制の根底にふれぬ限り反体制的な要求も取り入れること。たとえば、一見社会主義的な福祉政策などを取り入れて、社会的な不満が醸成されるのを回避し、そうすることで体制を強化しているし、体制批判者をも取り込む、体制に従属させ、従属させることによって何らかの利益を与える、利益の体系を組織していること。

六、情報、教育の機構を事実上支配して、操作可能なものとしてしていること。

七、司法、警察、軍を掌握して、必要とあれば強権の行使に訴えること。

この体制の弱みとしては次のものが考えられる。

一、資本の利潤追求という一元的な合理主義が貫かれていること。これが現在の体制を支配している原理であるが、そのため人間の希求を無視したり、たとえばコンベアシステムとか、オートメーション工場での孤独な管理作業といった、肉体的、精神的に苛酷な労働を強いていること。これは、必然的に反乱の要素を培養している。

二、経済的な二重構造の下で、物質的な安楽から取り残されている底辺の層が少なくないこと。物質的な安楽が一般にいわれているほど大多数の人々を潤おしていると考えるのは事実には反してい

る。

三、大多数の人間が決定権から除外されていること。これは、寡頭支配層への極端な決定権の集中という事実の裏返し現象であるが、したがって大多数の人々の間にはどうにもできないという鬱屈した感情がある。それは、諦念を捨て去ることができるなら、火をつければ燃え上る感情である。

四、生活水準、教育水準の向上、情報流通の手段の増大によって、被抑圧者大衆の知的水準が上ってきていること。つまり、欺されにくい状況が生まれてきていること。

五、生活様式の激変によって、これまで長年にわたって続いていた、権威に服従するといった態度が特に青年の間で失われつつあること。これは、大衆を羊の状態から脱出させる大きな要素である。

現体制の強みと弱みについては、以上のようなものが考えられるが、現在の抑圧の機構を打破するためには、それらの強みと弱みとともに、この機構を生みだし、それを支えている文明観そのものを問題にしなければ、変革は根源的なものとはなりえない。それは、生産力を向上し、物質的な安楽を増大することが人間の幸福につながる、という文明観であるが、この考え方の下で環境汚染という人類の肉体的な破壊がもたらされつつあるとともに、いわゆる疎外状況という人間精神の破壊をもたらされつつあるのであって、われわれは、新しい文明観にもとづいた新しい社会を樹立することなしには、解放されることはないのである。

以上の概括的な分析を通じて、われわれは現在の抑圧の機構を打破するためには、何をなすべきか、誰が行動の主体となるのか、われわれの解放の可能性はあるのか、について、いくつかの必要な認識をえられたと考えられる。それらを列挙してみると次の通りである。

◇ 何をなすべきか

一、独占資本と国家権力が結合し、資本主義体制を維持している以上、われわれは国家権力そのものを問題とせざるをえないこと。国家の中立性という欺瞞を打ち破るとともに、大衆組織による二重権力化の推進によって、政治権力、経済権力の空洞化をはからねばならないこと。

二、現在享受している物質的な安楽の階級性を暴露すること。つまり、それは大衆の不満緩和と大量消費市場確保のためのものにすぎないこと、そしてその物質的な安楽を作りだしている大量生産・大量消費システムが、人間の肉体的、精神的な破壊をもたらしていることを暴露すること。そして、新しい人間の生活様式、文明を創造してゆかねばならないこと。

三、体制に対する敗北主義的な諦念を絶えず打破しなければならぬこと。体制に対するあらゆる異議申し立て、また体制から離脱した形での生存の追求は、少くとも萌芽として、革命的要素を含んでいること。

四、議会、労働組合、革新諸政党的体制補強的な性格を暴露し、それらに代る、大衆の意思を直接表明する、革命的な組織をつくらねばならないこと。

五、体制が柔軟性を持っている以上、現在のメカニズムの根底をゆるがすことのない改良はすべ

て、体制を強化するものとして取り込まれる怖れが非常に強いことを認識して行動すること。したがって、既存の機構内部の異議申し立て―改良のみではなく、新しい大衆の機構を通じて、体制に從属しない、新しい利益の体系を組織してゆくことが重要であること。

六、情報と教育の階級性を暴露すること。自主的な情報流通と教育機構の組織化をはかること。

七、司法、警察、軍に対置する力を持つか、あるいはそれらを内部から崩壊させる工作が必要なこと。

八、資本の利潤を確保するためではなく、大衆が使用するために生産する、経済のシステムを作りだすこと。その生産の過程において、人間の諸欲求を満たす形での労働のあり方を作りだすこと。

九、すべての人々に決定権を与えること。それを可能とする組織の型態と慣行とを育てること。

◇ 誰が行動の主体となるか

現在の体制の非人間的な性格を知り、そこからの脱出を願っている人間たち、また物質的にも恵まれない底辺の層が、以上にあげた行動の主体となる。

◇ 解放の可能性はあるか

行動の主体となる人々が存在していること、大衆の間には管理されていることへの大きな不満があること、欺されにくくなっていること、権威への従属性が大衆の中で薄れつつあること、環境汚染に見られるように、現在の体制はその内部に崩壊の兆しをはらんでいること、などを考え合わせ

ると、現在の抑圧の機構の打破も、決して考えられないことではない。

以上の状況の分析とそれによってえられた必要な認識によって、われわれがとるべき行動の性格と主体とはかなり明確になった。それらを整理して、われわれがなすべき、またなしうる行動を具体的に考慮してみれば、われわれの目標と、目標達成のための行動と組織とは、次のように確認することができる。

一、目標

われわれが人間としてわれわれ自身の運命を自ら決定できるようにするためには、現行の抑圧の機構とそれを支えている文明観を打破しなければならぬ。その打破の彼方に、われわれは新しい社会を想定する。それは、政治的には各個人の自由な発意と自由な合意に立脚する直接民主主義社会であり、経済的には、経済が労働者組織によって管理される自治管理社会であり、形態的にはコミューン連合社会である。

一、目標達成のための行動と組織

以上の目標の達成は、いかなる権力的な手段によっても達成できない。それは、大衆自身によって行われるものであり、自立的な大衆組織及びそれらの連携による、生産手段の奪取、政治権力の掌握によって成就される。そのような大衆組織としては、革命的サンジカリズム組織、地域的大衆組織、自治管理企業が考えられ、それらを補助する革命的イデオロギー組織の必要も認められる。

それらの性格と機能とは次のようなものである。

イ、革命的サンジカリズム組織 未来社会において、企業の労働者管理を行う組織であり、各種異議申し立てを通じて、企業権力に対する二重権力化の推進をする組織である。単に賃金、労働時間などの利益擁護のための闘争のみではなく、労働の性格、事業の社会性をも問題とし、企業運営にかかわる一切に次第に介入して行き、自治管理を準備する組織である。ここでは、現行体制下における非人間的な労働にかわる新しい労働のあり方や、相互理解と合意と友愛にもとづく新しいモラルの追求、社会の主人としての労働者の自己教育、直接民主主義的な社会運営の訓練が行われなくてはならず、そうすることによって未来社会が用意されるとともに、現行権力が空洞化される。

ロ、地域的大衆組織 未来社会において地域的自治管理を行なう組織であり、地域住民の利害に関する各種異議申し立てを通じて、地域的行政権力に対する二重権力化を推進する組織である。未来社会を用意する、新しい人間のモラルと慣行の確立の場であることは革命的サンジカリズム組織と同様である。

ハ、自治管理企業 ユートピア運動と呼んでもよいもので、自発的な参加者の出資と労働によって運営される、農業、工場、企業、金融機関、学校である。資本主義体制の中の競争にさらされる、資本が弱小であるという制約はあるが、一定の制約を除けば現行の支配のメカニズムから相対的に離脱した組織であり、ここでは、企業権力や行政権力の下にある革命的サンジカリズム組織や

地域的大衆組織と違って、新しい人間のモラルと慣行の確立のために、未来社会の粗型としての実験が可能であり、生産、消費、経済計画、教育、司法、自衛などについて現実を通じての模索が行われうるし、それによって新社会を目指す他の革命的大衆組織への模範を示すことができる。自治管理企業の役割は、現行文明観の下にある既存の組織の中の革命組織形成と違って、そうした制約を離れ、新しい文明観の下に新しい社会を形成する実験という意味で、特に重要である。

二、革命的イデオロギー集団 先にかかげた目標の達成は大衆組織自身によってしか行われないうが、大衆組織内に知的な機能が欠けている場合、革命的イデオロギー集団の存在は不可欠である。この集団は、状況を分析するとともに、どのような条件の下で革命は可能か、どうすればそれに近づくことができるかを、大衆組織に示す、提案の機構であり、必要な場合には大衆組織間の連絡調整にあたる機構である。この集団は、いずれにせよ消滅すべきものであり、革命的大衆組織、あるいはその連合の一部門として吸収されるべきものである。

問題は、革命的大衆組織による二重権力化を推進し、階級的力関係において、可能と思われる時期に、一気に、攻勢に転ずる契機を見出すために、まず力をたくわえてゆくことである。さし当って、これ以上を図式化したのべることは空想の領域に属するであろう。

参考文献

- 主として参照した文献は次の通り。なお邦訳書については、しばしばその原著をも参照した。
- 「レ・タン・モデルヌ」特集『現代革命の可能性』、篠田浩一郎他訳、筑摩書房。
- アラン・トゥレーヌ著『現代の社会闘争』、寿里茂・西川潤訳、日本評論社。
- ルシアン・リウー、ルネ・バックマン著、『五月のバリケード』、岡村孝一訳、早川書房。
- コーン・ペンディット著、『左翼急進主義』、海老坂武・朝比奈誼訳、河出書房。
- 大学情報宣伝組織センター編、『大学とは何か社会とは何か』、谷長茂・福井芳男訳、中央大学出版部。
- ダニエル・コーン・バンディ他著、『学生革命』、海老坂武訳、人文書院。
- 三月二二日運動著、『五月革命』、西川一郎訳、合同出版。
- モラン、ルフォール、グロドレイ著、『学生コミューン』、西川一郎訳、合同出版。
- フランス全学連他編、『五月革命の記録』、江原順訳、晶文社。
- アンリ・ルフェーヴル著、『五月革命の論』、森本和夫訳。
- La grève généralisée en France, supplément à I. C. O., no. 72.
- Epistémon, Ces idées qui ont ébranlé la France, Fayard.
- Les murs ont la Parole, Tchou.